ボールバスターズ・クラブ　壱

＊この作品はフィクションです。実在する人物・団体とは一切関係ありません。

深夜。東京、西麻布。

外苑通りに面したガレージの前に、一台の軽自動車が止まった。繁華街から離れた住宅地にあるため、渋谷や六本木の喧騒とはほどとおく、森閑と静まり返っている。

車に乗っているのは、黒のブラウスに白のパンツスタイル、サングラスをかけた髪の長い女性だった。

女性は、ハンドバッグから携帯電話を取り出し、なにやら喋った。数秒後、ガレージのシャッターがするすると上がり、車は内部に滑り込んだ。再びシャッターが締まり、もとの静けさに戻っていった。

ガレージの内部は、外装の見すぼらしさとは対照的に、二十台ほどの駐車スペースがあった。煌々と白い蛍光照明に照らされたコンクリートの床は青い線で仕切られ、車が数台、停まっている。

女性は車を所定のスペースに停め、ドアを開けて降り立った。身長１６８センチのすらりとしたモデル体型。サングラスを外すと、くっきりとした眉の下に、大きな黒目がちの二重瞼の瞳。肉付きのよい鼻がその美貌を引き立てていた。

彼女は、ツカツカと白のパンプスのヒールでコンクリートの床を鳴らしながら、奥にあるドアへと向かった。ドアの傍らに、小さなインターフォンがついている。長いしなやか指でボタンを押すと、「会員番号を」との声。

「Ａ１０３７８９０１」

「パスワードは？」

「八重桜」

「どうぞ」

ドアが開いた。

長い廊下の壁に３メートル間隔で幾つものドアがあった。ドアを開けると更衣室になっている。

女性はロッカーを開け、Ｔシャツとスパッツを取り出した。それから、ブラウスを脱ぎはじめた。滑らかな肌が露になった。

壁にかけられた電話が鳴る。受話器をとると、「用意が整いました」との声。女性は受話器を置いて立ち上がった。引き締まった脚を動かして、更衣室の奥にあるドアを開ける。

赤い絨毯を敷きつめた３メートル四方の小部屋。男が一人、吊るされていた。天井からぶらさがったロープに両手首を縛られ、脚は大きく開いた形で床に固定されている。白いワイシャツにネズミ色のズボン。年齢は三十代のはじめだろうか。こけた頬と不精髭がそれまでの男の不健康な生活を現していた。

男は、現れた女を見るなり、びくりと体を痙攣させた。口はガムテープで塞がれている。眼だけが懇願するように女を凝視していた。

「サラ金？　それとも不法滞在？」

女性はからかうように言い、手にしたカッターナイフで男のシャツを引き裂きはじめた。

男が塞がれた口をもごもごと動かした。

「大丈夫、あと一時間耐えられれば借金は帳消しなんでしょ？　運がよければ、男のまま家に帰れるかもよ」

彼女は楽しげに、ズタズタになったシャツを脱がせ、今度はズボンを切り裂きはじめた。

「もっとも、よほどの幸運の持ち主じゃないと、それは無理だけどね」

全裸になった男の前で、女性はストレッチを始めた。体が柔らかい。左右に一八〇度開いた脚と上半身をぺたりと床に着けながら、彼女は続けた。

「よくほぐしとかないと、こないだは途中で痛めちゃって、中途半端で終わっちゃったのよね。翌日の撮影にも響くし……」

ストレッチを終えて立ち上がると、男は涙を流し、必死に身を捩っている。
「なによ、いまさら後悔してるの？　合意の上でここに来たわけでしょ？」
彼女は言うなり、脚を後ろに引き、思い切りはね上げた。

一時間後。
元の服に着替えた女性は、更衣室を出て、廊下を奥まで歩いた。奥の扉を開けると、そこは広大なラウンジだった。
女性はひとつのソファに腰を下ろした。白いブラウスに黒のロングスカートのウェイトレスが寄ってくる。
「お飲み物は？」
「マティーニを」
ウェイトレスはお辞儀をして去った。
彼女は煙草を取り出し、火をつけ、ソファの背中にもたれて、呟いた。
「すっきりした……。ストレス解消はこれにかぎるわ」
「よっ！　涼子」
いきなり肩を叩かれた。驚いて振り向くと、元グラビアアイドルの晴美だった。ピンクの臍だしのタンクトップに、膝丈のジーンズ、透明のサンダルという出で立ちである。

「なんだ、晴美か」
二十六歳の女優、涼子は肩を竦め、煙草の煙を吐き出した。
「なによ、私がここにいちゃ悪い？」
一歳上の晴美は、無遠慮に涼子の隣に腰をおろした。
「なんだか最近、お高くとまってない？　人気絶頂の大スターさんとは口もきいてくれないのかしら？」
「何言ってるのよ」
涼子は晴美を見ないようにして、運ばれてきたマティーニに口をつけた。晴美は、ソファの背中に右腕をかけ、ウェイトレスに「私はビールね」と言い、それから涼子を覗き込むようにして言った。
「昔はさんざん遊んだ仲じゃない。忘れたとは言わせないよ」
「やめてよ」
涼子は急いで微笑みをつくった。泣かず飛ばずの頃、さまざまな「遊び」を味わった仲だった。怒らせてはまずい。
たしかに、あの頃は、巨乳を売り物に男性誌のグラビアを席巻していた晴美のほうが、無名の水着モデルだった自分よりは「格上」だったかもしれない。だが、巨乳など、売り物になるのはせいぜい二十歳までだ。

晴美は、運ばれてきたビールを飲み干し、タンクトップの胸元から覗く盛り上がった乳房を大きく膨らませ、はあーっと息を吐き出した。
さすがに見事なものだ、と涼子は思わず視線が釘付けになった。あの頃は、大きな胸や長い脚の持ち主をうらましがったものだが、逆にそれをウリにしなかったからこそ（脚はともかく、胸はどうにでもなる）、ほんとうのメジャーな世界に入れたのだ、と今にして思う。
「ところで、今日はどうだった？」
晴美が、自分の股間を指さした。細い眼の縁がほんのりと赤くなっている。
「潰したよ」
涼子は平然と答えた。
「いくつ？」
涼子はＶサインをしてみせた。
「すごいじゃん。蹴りで？」
晴美は大仰に身を逸らし、それから右脚をちょっとあげてみせた。涼子は頷いた。
「さっすが～。元日本代表とやらの彼氏に蹴り方を教わったの？」
「やめて、昔話よ」
涼子は露骨に嫌な顔をしてみせた。
「晴美は、どうだったの？」

「一個だけ。これで」
晴美は、右手の親指と人差し指をこすりあわせてみせた。
「散々蹴ったんだけど駄目で、そろそろタイムアップだったから、やっとこさひねり潰したの。鍛えなきゃね。せめてこれだけでも、あんたには負けたくないからさ」
嫌な女だ、と涼子は晴美に見えないように唇を歪め顔を顰めた。
だいたい、ここは、芸能界でもＶＩＰクラスしか入会できないはずではなかったか。なんで、ＶシネマがせいぜいのＢ級タレントなんかが紛れ込んできたのか。
「私も蹴り潰せたのは一個だけよ」
晴美がじっと見つめているのに気づいた涼子は、慌てて相手を立ててみせた。
「二個目は、ひねり潰したの」

ここ、ボールバスターズ・クラブがオープンしたのは三年前。複数の大手芸能プロダクションが出資・運営する会員制高級クラブである。
その存在を知る者は限られている。なにしろ、ストレス解消のため、男の睾丸を潰すという、非合法的な娯楽を提供する場なのだから。
睾丸を潰される役の男性は、膨大な借金を抱えた者がほとんどだ。債務帳消しと引き換えに、このクラブに提供される。会員資格を得た女性たちは、それぞれに与えられた専用の部屋で、玉

潰しを楽しむのである。睾丸を潰された男性が、その後どう「処理」されるかは、会員たちにも知らされていない。

涼子が会員資格を得たのは一年前。彼女を前にした犠牲者たちは脅え、すでに借金帳消しの誘惑に勝てず、合意書にサインしたことを後悔している様子がありありと伺えた。潰しても構わない、と言われた彼女は、躊躇うことなく、犠牲者に容赦ない蹴りを浴びせた。呻き、涙を流し、痙攣する犠牲者の姿に、涼子は激しいオルガズムを覚えた。だが、なかなかうまく命中せず、結局潰すことはできなかった。

月に二度のペースで通ううちに、コツを覚えた彼女は、命中率も上昇し、さらに蹴るだけではなく、握り潰す、ひねり潰す、踏み潰す等の技を覚えた。今や、「玉潰し」は彼女の生活に欠かせない趣味となったのである。

「それにしても、知ってる？」

晴美が話題を変えた。

「なに？」

「ここのことが、一部で噂になっているらしいよ」

「え！」

涼子は青ざめた。こんな「趣味」が外部漏れたら、せっかく築き上げてきたタレント生命は一

貫の終わりだ。

「社長たちがもみ消しに必死になっているみたい。まあ、マスコミの口は塞げるだろうけど、厄介なのは、噂のネタ元はプロじゃなくて、アマチュアのネットワーカーらしいんだよね」

「……」

「やな時代だよねえ。有名人に焼き餅やいてる馬鹿な素人に、インターネットなんて玩具を与えるから、こんなことになるんだって社長が言ってたよ。しばらく自粛したほうがいいって忠告されたから、最後に一個潰してやろうと思って来たわけ。あんたも、気をつけたほうがいいよ」

「そっか」

涼子はあっさりと言った。

「ありがと。私もしばらく自粛するよ」

「なにかと違って、禁断症状は出ないだろうから、安心なさい」

涼子は、きっと美しい眉をつり上げ、晴美を睨み付けた。

「あ」

晴美が涼子の肩ごしに遠くを見、さっと片手をあげた。涼子はつられて振り向いた。

女優の美紀が入ってきた。

「今日は、何人相手にしたの？」

晴美が屈託なく訊ねた。
美紀は晴美と同じ二十七歳。少林寺拳法の使い手である彼女は、必ず潰され役の男は二人選び、縛らせない。必死に向かってくる男たちを叩きのめし、動けなくしておいて潰すのだ。
一六七センチのスレンダーな彼女は、水色のワンピースにサンダルという出で立ちだった。ボーイッシュな顔だちで人気上昇中である。
「まだ、やってないんだ」
美紀は、足は留めたが、急いでるというふうに、眼を逸らした。
「え？　なに、なんかあったの？」
涼子が訊ねた。美紀は、「これ」と手にした金属製のものを示した。
「なにそれ？」
「デジカメ」
「それが、どうかしたの？」
「それがさあ」
美紀は、声を潜めた。
「駐車場に変な奴がいたんだよね」
「変な奴？」
「柱に隠れてこっちを見てたの」

「え？　ここの従業員じゃなくて？」
「うん。ぱっと視線が合ったら慌てて隠れたから、追いかけて、金玉蹴り上げて、手刀浴びせたら、あっけなく失神しちゃった」
「さすが少林寺拳法。どっかの国で習った護身術が役立ったみたいね。で、そいつは何者なの？」
「わかんない。三十くらいの、見るからにオタクっぽい奴だったよ」
「なんでそんな奴が？」
「知らないよ。デジカメ持ってたから、何を撮影したか確かめようと思ってさ」
「その男は、どうしたの？」
「知らない。あと三十分は目を覚まさないはずだから、大丈夫だと思うよ」
「とにかく、そのデジカメ、見てみない？」
晴美が言った。美紀はきょとんとした。
「まずは、ここのスタッフに届けようと思ったんだけど」
「ここにはそう簡単には潜入できないはずよ。ひょっとしたらそいつ、従業員かもしれないじゃない。だとしたら、まずどんな内容か、確かめたほうがいいよ」
涼子はハッとした。晴美は昔から頭は切れるたちだった。
たしかに、信じられるのは「共犯者」である自分たちしかいない。

三人はソファに座り、額を寄せ合ってデジタルカメラの液晶画面に見入った。
画面に、いきなり醜男の丸顔がアップになった。
〈はい、ここが噂の某クラブです。やっと潜入に成功しました。どんな芸能人が現れるか、注目注目〉
「こいつよ」
美紀が言った。
「やっぱし漏れてたんだ……」
晴美が唇を噛んだ。
〈おっと、誰か来たぞ〉
画面はパンした。一台の自動車が滑りこみ、ドアが開いて、ミニスカートをはいた小柄な茶髪の少女が現れた。
「あ、これ恭子ちゃんじゃない？」
「ほんとだ」
「あんなお子ちゃまが、こんなとこに来てるとはねえ」
「ドラマで、男をボコボコにする趣味を覚えちゃったのかな」
つづいて、もう一台自動車が入ってきた。下りてきたのは二人だった。ジーンズをはいた脚の長い少女と、白いロングドレスの少女が、ともに大きな胸を揺らしながら出てきた。

「あれ、江梨子と栄子じゃない？」
「イエローなんとかの？」
「そ。あそこも最近は空手を習わせてるっていうけど」
三台目の車から降り立ったのは、髪の長い長身だった。
「やれやれ、ありさまで会員だったんだ」
「ナースが、人に怪我させちゃいけないよね」
「あーっ！」
涼子が思わず叫び、慌てて口を抑えた。
「あら、涼子じゃん」
「嘘……」
涼子は呆然と両手で顔を覆った。不覚にも駐車場を出る前にサングラスを外してしまった。顔がはっきりと映ってしまっている。
「私も映っちゃってる」
晴美がため息をついた。
涼子は顔をあげ、もう一度画面を見た。
美紀がカメラに向かってズカズカと接近したところで、終わった。
「助かったよお」

涼子は倒れこむように、美紀に抱きついた。
「美紀が見つけてくれなかったら、お終いだったよお」
「許せない……」
晴美が呻くように言った。
「とっつかまえて、締め上げてやろうぜ」
美紀が、涼子の肩を撫でながら、言った。（つづく）